

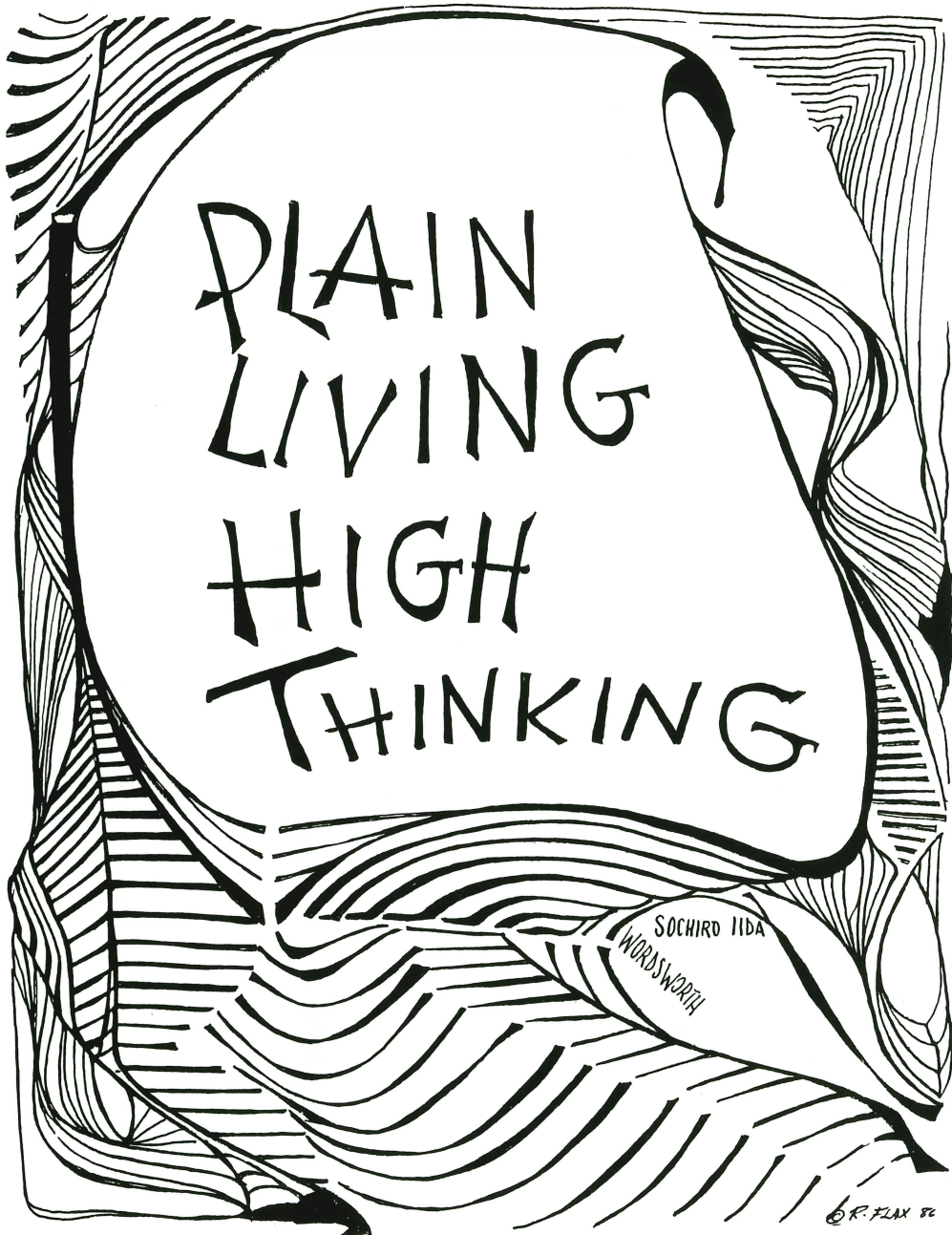
# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス'86秋

第7回大学院共同セミナー  
●人間性と犯罪

第136回大学共同セミナー  
●文学と風土

●緑の中のオープン・ハウス



Plain living and high thinking

No.104

## 風景の成立

—「近江八景」をめぐる比較文化史—

東京大学教養学部教授 芳賀 徹

## 自然と風景

風景というのは、自然があるところ何処にでもあるというわけでない。自然と風景とのあいだには、実に大きな隔たりがある。何を風景とするかは、与えられた自然の条件によっても違うし、自然の条件に規制されながらそこに生きている人間のものの見方、感じ方によっても変化するものであり、そこにはいろいろな組み合わせがある。

要するに、自然が作りあげる独特の条件が風土であり、そこに生きる人間があるまともを選び取り、切り取ってきて、評価するようになったときに、はじめて風景というものが成り立つのではないだろうか。

## 風景と絵画

中国人と日本人は風景をどのように描いてきたのだろうか。中国で風景が成立するのは、非常に早く、唐代であったといわれているが、風景画が画壇で主流となるのは11～12世紀の宋代からであったといわれる。

これに対して、西洋で風景画が独立して描かれるようになるのは、中国より5世紀ほど遅れた17世紀に、オランダでレンブラントやロイスタールがでてきてからであった。風景画が画壇で大きな位置を占めるようになるのは、19世紀前半のロマン主義時代のイギリスで、コンスタブルとかターナーらの出現を待たなければならなかった。

②

風景画が描かれるようになったのだろうか。おそらく、神話や伝説が画題の中心であった西洋に対して、中国では人間を超えた偉大な力を自然の中に認めるという世界観があった。背後から働いていたからではないだろうか。

## 「瀟湘八景」の成立

そこでまず、中国の「瀟湘八景」という風景画の成立について考えてみよう。

中国大陸の真ん中を西から東へと東シナ海に流れ込む揚子江が大きく曲りくねったところにある、中国で二番目に大きい洞庭湖と、そこに流れ込んでいる湘江という川と、さらに湘江に流れ込むもう一本の瀟江が交叉する一帯が瀟湘・洞庭地方である。この地方は、古くから風光明媚な地域として有名であり、様々の神話や伝説が伝えられていたうえに、

李白その他詩人たちが詩に詠んだことで、さらにいつそう風景の美が際立たされ、様々な詩的映像を生み出していった。

画家宋迪がこの瀟湘・洞庭地方から八景を選び出したのは、北宋風の厳しい固い画風から、南宋風の柔らかい画風へと移ろうとする12世紀のことであったといわれている（宋迪自身の絵画は現存していない）。

この「八景」をみると、瀟湘・洞庭地方の風土固有の情緒や詩人たちが詠んだ風物など唐以前からの豊かな文化的蓄積が背景となっており、その巧みな組み合わせの上にはじめて「瀟湘八景」が成立したことがわかる。

山市 晴風

漁村夕照  
煙寺晚鐘  
瀟湘夜雨  
遠浦歸帆  
洞庭秋月  
平沙落雁  
江天暮雪

## 風景画の輸入

鎌倉から南北朝、そして室町時代を通じて、この中国宋元の水墨山水画が日本にたくさん伝えられた。なかでも特に尊重されたのが、宋代の禅僧牧谿と玉潤が描いた「瀟湘八景」であった。日本知識層における牧谿への偏愛ぶりは、足利将軍がもっていた約二三〇点を越える中国画のコレクションのうちの百数点が牧谿の作品で占められていることから確認できる。

「瀟湘八景」を中心とする宋元絵画の輸入・学習・撰取の過程は、比較文化史からみても興味深いことである。「簡潔な筆致ではあるが、荒っぽくて粗雑で、手にとってじっくり味わい楽しむような作品ではない」と中国で評価されていた牧谿を、日本人は、逆に高く評価し多くの作品を輸入した。中国から深い文化的影響を受けながらも、そこに一種独特の審美眼・価値観を働かせて、作品をよりわけ、自分の好みにあったものを選んでいたのである。

こうして、南北朝から室町時代にかけて輸入された牧谿・玉潤らの絵は、14～16世紀の日本の画家たちの手本となり、ひたすら模倣



牧谿「漁村夕照」墨画33X113cm

され、学ばれたのである。従って、当時の日本の風景画はシナ趣味一辺倒であったということがいえるだろう。

### 「近江八景」を見立てる

ところが、16世紀初め頃になるとそれだけでは物足りなくなり、「瀟湘八景」にあたるような風景を日本の中にも「見立て」ように動きが出てきた。

前関白近衛政家という人物が、琵琶湖の南の大津の或る武士の家に逗留したときに、八景を見立てたと伝えられていたが、そうではないらしい。おそらく16世紀から17世紀のあいだに何世代かに及ぶ選択の過程があったのちに、政家の孫の子供である近衛信尹（法名は三鏡院）が、最終的に「近江八景」を見立てたというのが、より確かな史実とされている。

- 粟津 晴嵐
  - 瀬田 夕照
  - 三井 晚鐘
  - 唐崎 夜雨
  - 矢走 帰帆
  - 石山 秋月
  - 堅田 落雁
  - 比良 暮雪
- こうして、日本人はこの「近江八景」の成

立をきつかけに、長いシナ趣味一辺倒の風潮から、はじめて文化的に独立することとなる。

ところで、「瀟湘八景」と「近江八景」を較べてみると、前者の場合には、八景の中に「瀟湘」と「洞庭」の二つしか地名がないのに対して、後者の場合には、すべてが地名と組み合わされている。それだけ全体としてのスケールは小さくなっているが、逆に焦点はより鮮明になったのではないだろうか。しかも、選ばれた地名のほとんどすべてが、奈良・平安朝以来、この地方を行き来した人々によつて親しまれ、讃えられ、詩歌に詠まれてきたものであった。

一旦、この「近江八景」が成り立つと今度は、この風景が日本でもさらに様々の詩歌・文学・絵画を生み出してゆくこととなった。例えば、

辛崎の松は花よりおぼろにて  
病雁の夜さむに落ちて旅ね哉  
行春を近江の人とおしみける

という芭蕉の句は「近江八景」、さらには遠く「瀟湘八景」をイメージさせるものであろう。

### 風景と見立て

K・クラーク（イギリスの美術史家）は「風景画論」のなかで、風景がいかに絵画のなかに取り入れられたか、その歴史過程を論じているが、「瀟湘八景」の成立はその典型であったといえるだろう。ところが、日本の「近江八景」の場合には、中国の「瀟湘八景」という風景画がまずあって、それに見合うものが日本の自然のなかに求められて風景が成立し

た。

Landscape into Artではなくて Art into Landscape——まず、さきに絵があつて、やがてその絵に合わせて風景が見立てられるという例は、古今東西他のどこにもなかったのではないか。このように考えると、この「見立て」という独特の外国文化輸入の技術は、日本文化史を考える上で、注目に値する。

単に中国にあるものをそのまま輸入するのではなく、それを日本のものにあてはめることによつて、中国のものがより親しいものになつてくると同時に、見立てられた日本の対象が格上げされる。だから、いまや琵琶湖は洞庭湖に格上げされ、これまで日本人のほとんど誰も見たことのなかった洞庭・瀟湘の風光が琵琶湖周辺でも見ることができるようになった。「見立て」というのは、異国のものを自国のものに同化するプロセスとして、ずるがしこいといつてよいほど賢明な、しかし少々いじましいテクニクであった（これは明治以後、今日の「原宿シャンゼリゼ」や「渋谷スベイン坂」にいたるまで、西洋の都市景観を相手にしてなおしきりに繰り返されることとなる）。

結局、風景というものは、水や山や木や気候など、その土地に特有の自然条件があるだけでは十分ではなく、そこに何世代にもわたつて人々が住み、働きかけ、愛着し、讚美するという文化的伝統が蓄積されてはじめて成り立つものだということがいえるだろう。

（文責・編集者）

第7回  
大学院共同  
セミナー

人間性と犯罪

総合犯罪人間学をめざして

Ⅱ 主題 Ⅱ

期 日  
'86. 7. 4 ~ 6

▼ゲスト講演「犯罪と時代性」

劇作家 別役 実氏

▼講話「人間形成過程と犯罪性の問題」

聖心女子大学名誉教授 岡 宏子氏

▼講義・演習指導

Ⅰ 人間行動としての犯罪——わが心の

よくて殺さぬにはあらず——

筑波大学社会学系教授 小田 晋氏

Ⅱ 少年非行の現代と伝統——若者のパ

ソナリティの変化から——

上智大学文学部教授 福島 章氏

筑波(7)、慶応義塾(5)、東京(3)、

学習院・立教・法政・早稲田(各2)、

中央・東京国際・東京理科・日本女子・

明治学院・武蔵(各1)、その他(4)、

以上13校。

◇

今日、「犯罪者と犯罪現象に見られる  
その人間的・社会的意味が著しく変化し  
つつある」と言われる。確かに、近年「奇  
妙な人間性を感じさせる」犯罪が増し、  
それらは、われわれが普段考えている人

史学などの知的諸領域からの活発な発言  
を積極的に受け止め、今日の人間性と時  
代精神に迫る(総合犯罪学)の構築の試  
みに他ならない。運営委員として終始こ  
尽力いただいた小田氏によれば、現在、日  
本の犯罪研究は、一五年に及ぶ若手研究  
者の空白時代を迎えている」という。

セミナー終了後、「先生方の深い学識  
を核としつつ、異なる専門領域から出発  
し、一つの共通テーマに収束させてゆく  
研究態度は、今後の犯罪学の発展の可能  
性を示唆するのに十分であった」との感  
想が寄せられた。参加者は、近年の文化  
諸科学からのインパクトを受け止めつ  
つ、犯罪に対する新しい(人間学的見  
方)を形成してゆく端緒を掴み得たこと  
だろう。

◇

元来、学際的性格を備えている犯罪学  
にとって、「異分野の研究者との交流は  
絶対不可欠」(小田氏)になっているとの  
認識に立ち、セミナーの構成は、各講師  
が専門的知識を開陳する講義の時間と、  
学生の自由参加により、質疑・討論を展  
開する演習を組み合わせた。さらに、そ  
の中に、現代の犯罪現象に対するユニ  
ークな解釈によって注目を集めている別役  
氏の講演を織り混ぜる工夫がなされた。

初日の講義Ⅰ、Ⅱ及び演習Ⅰは、小田・  
福島両氏を中心にして、特に精神医学的  
見地から犯罪を解説してゆく時間に当て  
られた。

講義Ⅰで小田氏は、犯罪学史の展望を

与えるべく、これまでの犯罪研究の足跡  
を丁寧にとった後、現在、エスノメソ  
ドロロジー、人類学、新生物主義などの影  
響を受け、大きな動揺を経験しつつある  
犯罪学の進むべき方向として、「生物学  
的、心理学的、社会学的な三次元の立体的な犯罪学の構築をめざすべきだ」と総  
括された。

続いて、福島氏は講義Ⅱで、従来の非  
行心理学の概念ではとらえきれない現代  
型の少年非行を、以下のように分析。「飢  
えと渇き」を原因とする50年代の「生活  
型非行」、「暴力」を特徴とする60年代の  
「反抗型非行」に代わって、80年代から  
はスリルを楽しむための万引きや暴走、  
薬物を乱用するなどの「遊び型非行」が  
顕著になってきた。「この新しいタイプ  
の非行の背後には、父性原理の後退とそ  
れに伴う母性の肥大化、飢えの欠如、イ  
メージ情報伝達するテレビの普及など、  
日本社会が戦後四〇年間にたどって  
きた社会状況の変化がある。現代の少年  
非行は、そのような社会環境の変化の中  
で、少年のパソナリティが根本的に変  
化した結果である」。

◇

第二日目は、午前中に中里、加藤両氏  
による講義Ⅲ、Ⅳ、昼食を挟んで演習Ⅱ  
が行われた。中里氏の研究は、「なぜ、  
人は犯罪を犯さないのであるか」という「裏側  
から見た犯罪研究」だが、氏は、犯罪の  
抑止因としての「誘惑への抵抗力」Ⅱ「自  
己抑制力」と「思いやり行動」Ⅱ「愛他

Ⅲ 犯罪行動の抑止因としての自己抑制  
力と愛他性

東洋大学文学部教授 中里至正氏

Ⅳ 日本と西ドイツにおける犯罪の特徴

とその国民性の比較——青少年犯罪・

女性テロリストの比較研究を中心に

慶応義塾大学法学部教授 加藤久雄氏

▼運営委員

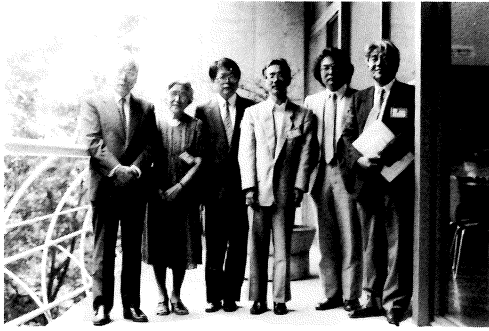
筑波大学社会学系教授 小田 晋氏

▼参加者 33名

罪学が、現代の犯罪や非行の解明の手段  
としては、もはや十分ではないという問  
題意識に立ち、刑法学、精神医学、心理  
学、社会学のみならず、文学、哲学、歴

間性の許容範囲を超えるかのような印象  
を与えている。

今回のセミナーの課題は、大学院レ  
ヴェルで個別科学の研究を志す人たちが  
一堂に会し、「人間にとって犯罪とは何  
か」を、学際的な視野から徹底的に議論  
し合うことにあった。それは、既存の犯



左から中川、岡、小田、福島、加藤、中里の諸氏

行動」の仕組み、形成と発達などに関する興味深い実験法とその結果を紹介。特に最近の顕著な傾向として、「自己犠牲的愛他行動が減少してきている」点をあげ、「誘惑への抵抗力や愛他行動などの道徳的行動は、小学校時代に急激に発達する」、「この道徳的行動の基本には、感動、同情、恐れなどの情緒と強い関係を持つ動機的側面があり、それは頭で善悪を判断する認知的側面の前提をなす」とされ、犯罪・非行を抑止する観点からの「道徳教育」の重要性を指摘された。

加藤氏は、講義Ⅳで「犯罪成立の要件」について解説。犯罪が成立するためには、法律に規定してあること、その行為が違法性を持つていること（例えば、医師の手術、正当防衛などの場合は違法ではない）が必要だが、それだけでなく、「そ

の人間に責任を問うことができることが、重要な要件になっている。すなわち、「自分のしている行為に対して善悪の弁別能力を持ち、さらに、それに従って自分の行動をコントロールできる統御能力があるかどうかが問題とされる」。したがって、「精神の障害とは何か」、「正常か異常かをどう判断するか」などの〈客観的基準〉の確立が要請されていることを、刑法学の立場から強調された。

◇

刑法改正と絡んで、各界の議論を呼んでいる治療（保安）処分の問題を中心に進められた演習Ⅱの終了後、ゲスト講演には、犯罪を手掛りに時代を鋭敏に描写してきた劇作家・別役氏をお招きした。

かねてから「犯罪に対し、何か得体の知れない興味」を抱き続けてきたという氏は、「犯罪を通じて時代を読み解くことができるかどうか」に焦点を合せたお話を、「犯罪と時代性」の問題を、以下のように描き出された。「犯罪を通して、

時代や人間性の変化を読む時に手掛りとなるのは、事件の中のナゾの部分、奇妙な部分である」というのも「犯罪者の行為は、時代の無意識的な部分を背負い込んでいることが多く、それによってはじめて時代の内密な出来事、深層部分が理解される」、「現代では、自分の感じている抑圧を特定化できなくなっている。個々人が不特定の憎悪、怒り、恨みをどのように対象化してよいかわからない形で抱え込まれており、それが何かを

きっかけとして偶発的に犯罪と結び付く」のである。「深川誘拐殺人事件の際、犯人が電話で『私は、いわゆる、誘拐犯です』と言ったという。そこには、『私は主婦です』と言いつつ、『主婦してます』という言い方と同じように、擬似体験の積み重ねによって、対人関係を得ようとする姿勢が見られる。かつてのようには、現実とは異なり、舞台は擬似体験というはつきりとした区別がなくなり、舞台も現実も全部同じ平面で擬似体験をしている。そこにわれわれの生きている時代の奇妙な歪みを感じられる」。

劇作家の持つ異様なまでの鋭い言語感覚に基づいた〈犯罪のドラマトゥルギー〉に対して、参加者から「犯罪への学的アプローチとは次元を異にする現代の犯罪像が、特に新鮮で面白く感じられた」との感想があり、「いつもの視点ではない視点から、現代社会の中で自分の置かれている位置を測定する」よい機会となった。

◇

最終日の午前中は、前半は、前夜参加者によってまとめられたレポート発表を中心に、後半は全員参加の自由討論の形式で、総括集会が開かれた。各報告者は、それぞれの問題関心から切り取られた現代の「犯罪の断面」を浮彫りにした（後掲の「参加者のレポートから参照」。「専攻の異なる人たちとの対話は、自分の立場を再認識するのに役立つばかりでなく、犯罪に対する他のアプローチについ

ての興味を一層かきたてるものであった」との認識は、初日の自己紹介で多くの参加者が示した「異分野からの刺激を受けた」との欲求が、十分に満たされたことを物語っている。

小田氏によれば、「犯罪とは日常的な枠組の中で生活してゆくの耐えられなくなった時に、この枠組を破壊しようとする行為」である。現代の犯罪は、宣伝的、挑戦的、露悪的といった特徴を持つ「劇場犯罪」と呼ばれる一方、グリコ・森永事件や通り魔殺人などの多くの現代型犯罪は、われわれに「何か得体の知れない」無気味さを感じさせる。これらの犯罪は、一見穏やかな現代の〈安定社会〉の底流に潜む「目に見えない抑圧的原理」の噴出であり、それはまた、「正気と狂気」、「現実と虚構」の区別を見失った「境界線喪失の時代」（小田氏）における、現代人の「生活感覚の破綻」（別役氏）を示しているのかも知れないのである。

「犯罪は、社会の抱える病理の反映」と見ることができると。その点、今日の社会を考えてゆく上で、様々な犯罪事件の示唆するところは少なくない。このセミナーは、犯罪を通して人間を考える「逆照射された人間学」を探究する試みであった。参加者が〈身体〉・〈心〉・〈社会〉の三つの軸の交差を通し、「人間性の深淵」を望見することができたとすれば幸いである。

最後に、この共同セミナーは、共同セ

ミナー委員会委員長として、一〇年間に亘り大七セミナー・ハウスの教育プログラムにご尽力下さった岡宏子氏に捧げられたことを記しておく。

「私が、心理学を勉強し始めた最初の二年間は、心理学のようなバカみたいな

### 参加者のレポートから



レポート発表——最終日の総括集会

### 犯罪行動の研究への視点を与えられて

私は、心理学を専攻しており、これまで攻撃行動の認知的個人差要因について研究してきた。その際、逸脱、非行、そして犯罪行動に対するよりフレキシブルな観点を持つことが必要だという切迫感から、本セミナーに参加することを決心した。

私は、機能性、器質性両側面における精神病や精神薄弱、天才、犯罪など、個人の逸脱から社会の病理現象一般にまで関心を抱いている。その理由は、それらの現象を学ぶことによって、自分の中に潜む異常性を理解し、自分自身や人間社会を少しでも理解したいと思

ものはないと思っていた。本当に人間らしいものが、次から次へとこぼれてしまうように見えたからだ。しかし、哲学や文学や芸術的表現など、人間にまともなぶつかってゆくような研究の仕方があるのだから、方法さえ考えれば、「人間を

うからであり、また、自己を逸脱という形で表現し得る人々への一種の羨望とでもいえるべき感情もある。私は、犯罪行動を、他の様々な行動のうちの一つのパターンと考える。このように見れば、現代の「遊び型」非行の出現は、A・マズローの「欲求の五段階理論」で説明できないだろうか。彼によれば、人間の欲求は、生理・安全・所属・愛情、自己尊重、自己実現の五つのタイプに分けられ、低次（生理）から順に高次（自己実現）の欲求に向かう。外界から与えること可能な最初の四つの欲求は、*basic*（外側からの調査でとらえ得る変数で、従来の「伝統的犯罪」はここまでの変数でもある程度は説明できる）ように思われる。

最後の自己実現欲求は、本人自身によってしか獲得しえないものであるため、自分によってしか充足できない。ここで人間は自己実現の対象、手段、目的、はては自己の実存の意味の問題に直面し、危機に陥る。そしてそのために引き起こされる犯罪行動は、「自己実現的犯罪行動」と呼べるのではないかというのが、私の考えである。

その際、私が怖れるのは、そのような犯罪が起こった時の社会の反応である。どちらが先かはわからないが、大衆、そして中立的伝達機関であるベキマス・コミの双方が、それらを容認、奨励しているように私は思える。娯楽雑誌などがわれ先にと事件のある局面のみを繰り返して取り上げるのは見るに耐えない。それは読者側の要求を反映しての結果かもしれないと考え、ますます危機感が増えるのである。また、ある事件に対する大衆のステレオ・タイプ的な反応・感情と、それに伴って生ずる個人の社会との一体感、安心感にも驚かされる。

「こぼさない」心理学があるはずだと思っただ。午後の講話の中で、氏は心理学を志すことになったきっかけについて以上のように語っている。氏は、「人間がこぼれてしまわない」心理学に科学者としての情熱を注いでこられたのである。

最近、私がマス・コミの伝達内容のバイアスと、大衆の興味本位的見方を感じさせられた事件は、豊田商事会長が殺された事件である。事件の現場にはたった二人の犯人の周囲にいただけ大勢の人々が立ち合っていたのにもかかわらず、誰一人として犯行を止めようとしなかった。その後、それが問題にされることもなかった。この事件とは全く異なる文脈を持つとはいえ、「キティ・ジェノヴィーズ事件」では、周囲の非援助的行動が社会問題となり、社会心理学における新たな研究テーマを提起したように、日本社会でこの反応は一体どういうことであろうか。

セミナーを通して、これまで研究どころか思考の対象としてすら把握しきれなかった犯罪という問題に、一歩でも近づいたことができたような気がして、嬉しく思っている。そして、期待していた以上に、先生方や他の学生と深く接する機会を持つことができ、今後の研究に関する示唆が得られたことを感謝している。

（東京国際大学大学院社会学研究科M1・渡辺美保子）

### 法学と医学の境界に立つ試み

私が今回のセミナーに参加した動機は、主題に共感をおぼえると同時に、最近興味を持っている犯罪心理学の先方のお話を聞きたいと思ったからでした。セミナーの内容は、私にとって十分満足いくものであり、また様々な専門分野の方々と話ができて、触発されることも多々ありました。

私がセミナーにおいて最も考えさせられた

なお、この講話をプログラムの第一部としたオープン・ハウス（11頁に別掲）が催され、同セミナーの参加学生も合流して、氏のセミナー・ハウスにおける働きに感謝した。

ことは、法律、特に刑法からの犯罪へのアプローチと精神医学からのアプローチの相違についてです。治療法（保安処分）に対する両者の考え方には実に大きな違いがあることを知りました。私自身は治療処分の必要性は十分認めつつも、それに賛成することにはためらいを感じてきました。その理由は、乱用による人権侵害の危険性が考えられることと精神鑑定はあいまいなものではないかと思えたからです。

人権侵害の危険性については、小田、加藤両先生から法定制度の要件を厳しくすると同時に、治療内容を充実させてゆくことで解決する方向が示されました。特に、小田先生の「患者と社会の仲立ちをする精神科医の存在」という考えには、興味を持ちました。また、鑑定の不確かさについては、実際に鑑定が分かれるのは、「限界値」に近い事件であって、それ以外の事件は検察段階で不起訴となっており、限界事例のみが裁判となってクロウズアップされている事実を福島先生から教えていただきました。治療処分については、特に加藤先生の法律家と精神医学の両面からアプローチするという見解も大変に参考になりました。法定要件を重犯罪者にしぼると同時に治療施設を拡充し、監視や治療の充実をはかるという三本立ての考え方には非常に得るところが多かったと思います。

私は、法的なアプローチは行為主義的で概念的であり、医学的なアプローチは行為者主義的であると考えています。その接点をとって犯罪を考えるためには、お互いに相手の観点やそれによってもたらされる利益を尊重し、利用し合わねばならないということ。このセミナーを通して学びました。

（学習院大学大学院法学研究科M1・高原明）

# 第136回 大学共同 セミナー

## 文学と風土

### ——日本文学の特殊性と国際性——

#### Ⅱ 主題 Ⅱ

C 古典芸能の特殊性と普遍性

——特に能を中心として——

筑波大学芸芸・言語学系教授

田代慶一郎氏

▼シンポジウム話題提供

武蔵大学文学部教授 仙北谷晃一氏

▼運営委員

日本女子大学一般教養部教授

鈴木和子氏

東京大学文学部教授 川端香男里氏

▼参加者35名(内女子20名)

▼全体講義

風景の成立

——「近江八景」をめぐる比較文化史——

東京大学教養学部教授 芳賀 徹氏

▼ゲスト講演

地方と普遍をめぐって

——ダンテと井伏鱒二——

作家 大江健三郎氏

▼セクシオン演習

A 坐俗の文学と立俗の文学

早稲田大学文学部教授 野中 涼氏

B 近代日本文学における土着的要素

東京女子大学文学部助教授

大久保喬樹氏

慶応義塾・東京女子(各4)、東京学芸・

筑波・東京・武蔵(各3)、東京外国語・

日本女子(各2)、一橋・法政・上智・

早稲田・お茶の水女子(各1)、その他

(6)、以上13校。

◇

日本が経済的に強大になるにつれて、欧米との間に「経済摩擦」を引き起こし、このままでは、世界的な孤児になるのではないかとこの危機意識が出てきている。しかも、この摩擦は単に経済面にとどまらず、その根底には日本と欧米との間の「文化摩擦」があると考えられているが、この両者に橋を架けることはできないも

期	日
'86. 5. 23	~25

のだろうか。

今回のセミナーでは、和辻哲郎以来論じ尽くされた「古い革袋」のようにみなされがちな「文学と風土」というテーマを、「文化摩擦」の解消という切迫した現実問題の中で再考してみた。果たして、日本文化が持つ土着的・地方的・特殊の要素は、国際性を持ちうるのだろうか。以下は、三日間に亘って行われたセミナーの概略だが、紙幅の関係で議論の一端しか紹介できなかったことをお断わり

しておきたい。また、本セミナーの企画運営にご尽力いただいた鈴木・川端両運営委員はじめ芳賀・大江・野中・大久保・田代・仙北谷の各氏に改めて感謝の意を表したい。

◇

自然の条件の組み合わせとして成り立つ風土は、地球上のいたるところに種々の形態をもって存在している。和辻哲郎は、人間の思想・文化の型がそうした風土の特徴によって規定される側面を強調したが、そこに生きる人間とその文化は、風土によって一方的に規定されるものなのだろうか。

セミナーの冒頭、芳賀氏は「琵琶湖とその周辺の自然があつて、それによって『近江八景』という風景観が生み出されてきたのではなく、中国の洞庭湖の『瀟湘八景』というコンセプトとイメージが輸入され、珍重されてはじめてそれが成立した」ことを指摘した(詳細は別掲)。つまり、日本人は中国から輸入してきた風景観を日本の風土の中に「見立てた」のである。この指摘は「文学と風土」を議論していくうえでの新鮮な見方を参加者に提示した。

◇

いま、俳句が国内ばかりか海外でもブームになっているという。「世界最短の定型詩」でもある俳句は、季語が持つ風土性と切り離して考えることはできないが、なぜ、今人々の関心呼び起こしているのだろうか。

都市化が進行し、自然からますます遊離しつつある現代人が、自然の大切さを再認識するようになったからなのだろうか。それとも、それは現代人の生活から自然が喪失してしまったことの反映なのだろうか。俳句や歳時記のブームが、そのまま自然の復権につながるものではないとしても、自然が持っている重みをとらえ直す端緒になるのではないだろうか。無意識の内に自然と溶け合うような日本の伝統的な「文学と風土」のあり方をとらえ直し、それを「自覚的な自然愛」(仙北谷氏)に高めていくことが必要であらう。

西欧で成立した近代文学を吸収しつつ、日本のなものを残存させている宮沢賢治・川端康成・大江健三郎らの小説の方法が最近、注目されている。近代文学が切り捨ててきた「他界的要素」(大久保氏)を抱え込んだ彼らの小説は、近代文学を支えてきた西欧の人間・世界観の行き詰まりのなかで、それにかわる一つのモデルを提供できるかもしれない。大久保氏は、日本文学が特殊の・土着的なものを残存させることによって、かえって新たなモデルとして普遍性をもちうるかもしれない、と指摘する。

◇

ところで、野中氏によれば、日本人は自然と密着し、そこに坐するという生活習慣のなかで「感覚的具象的認識」に限りない親しみを感じる思考形態を培ってきたという。このような肉体的状態と密接

## 地方と普遍をめぐって

——ダンテと井伏鱒二——

作家 大江 健三郎

文学者が想像力を理論的に考えるようになったのは、今から五〇年ほど前からだろう。例えば、サルトルは、様々な形に見える炎のなかに、僕たちが自分の恋人の顔を思い浮べたりするように、現実には存在しないものをそこに発見して、意味を与えるような人間の作用のことだという。またバシュラールは、僕たちがすでにによく知っていると思っている知識を、そうでないものにつくりかえていく力のことだと考えているようだ。

現に知っている世界から想像された新しい世界に向って、読者を飛び越えさせるような作品が想像力のある小説なのではないだろうか。このことを井伏鱒二とダンテを例に考えてみよう。

井伏の短編小説『かきつばた』と長編小説『黒い雨』の共通点と相違点を比較してみれば、小説家の想像力とは、どういふものか、ということがよくわかる。

『かきつばた』という作品は、戦後間もない頃に、井伏が福山市近郊に疎開していた時の経験を書いた小説で、カキツバタが狂い咲きしている池の中に、原爆で死んだ娘さんの体がポカッと浮んでいるのを発見するという単純なものだ。井伏は原爆で死んだ不幸な娘さんとカキツバタの狂い咲きを結びつけ、この両方を

僕たちが心の中ではつきりとつかむことができるように、すなわち、娘さんから想像力を働かせて原爆に向かっていくような心の飛び越えをさせようとする。そこで、彼は何を書くかといえばカキツバタのことを科学的に、正確に記述している。

なぜなら、太陽や月などの宇宙のめぐりに異常が生じると、人間の世界にも異常が生じるという宇宙のめぐりと人間の関係についての日本人の感じ方を井伏はつかまえているからだ。天変地異のような事態が原爆としておこって、その大きな歪が小さなカキツバタの狂い咲きをもたらし、娘さんを発狂させ殺してしまつた。小説を読み終ると、僕たちの心の中にはカキツバタと人間を超えたものが、くつきりと刻み込まれていることに気づくだろう。一方、『黒い雨』も原爆によつてもたらされた悲惨な状態を書いているが、そこでは、宇宙のめぐりと人間の関係から一歩踏み越えて、神とか宇宙に向つてまなざしをあげ、そこに望みを託しているという意味で、『かきつばた』と比較すると希望がみられる。

ダンテの『神曲』は、13世紀のイタリアの話だが、20世紀に生きる僕たちが現実の世界とそれを超えた世界について考える場合の力強い模範を示しているといえるだろう。

ダンテがローマの詩人バージルに導かれて地獄に行き、それから煉獄に行く……。そして最後には、子供の頃から憧

れていたベアトリーチェに案内されて天国へ行き、神の光を一瞬見るという話である。

ダンテは民衆の住むフロレンス周辺の地理を微細に描くことによつて、彼等を天国という知らない世界に飛び越えさせようとした。自分たちが現実に住んでいる世界を踏まえたいうでなければ、想像力を働かせることはできない、とダンテは考えていたにちがいない。原爆という大きな悲劇を書くためにカキツバタを確実に描き、それを通して、最終的にはもっと広い宇宙的なところに飛び越えていった井伏の方法とも重なるものだ。

つまり、井伏もダンテも自分が足を踏まえている現実の場所を確実にとらえて、それを踏み台にしながら、それを越えた世界に人間を押し上げるのでなければ文学は成立しないのだ、ということを示しているといえるだろう。

要するに、人間全体の普遍的な知恵に向つて何か新しいものをつくり出していくにも、文学者は自分たちが足を踏まえている具体的で現実的な風土を確実にとらえる必要がある。ただし、日本の風土、日本的な考え方にこだわらずに、日本的なものも絶対化してしまい、普遍的なものに向かつて飛び越える運動を止めてしまったところに日本の近代化の悲劇があったことを忘れてはならないだろう。

僕はいま、ダンテを読みながら、僕の小さななかでおこった出来事をもう一度小説に書き直している。(文責・編集者)

に関連して生みだされてきた美意識は、そう簡単に変わらないものだとともに、「生活様式が大きく変化している現代では、新しい美意識が誕生してくる可能性もあると考えた方が、次代の文化にとつてプラスになるのではないか」と野中氏は述べた。

世界的に都市化が進むなかで、文化の中からますます風土性が稀薄になりつつあるが、そこにあらたな文化の可能性を展望することもできるかもしれない。私たちの課題は、風土性に規定されつつ、それを乗り越えたものを諸外国の人々とのように共有しあえるのか、別の言い方をすれば、普遍的なものを共有しつつ、いかに独自の文化を主張できるのか、ということである。

大江氏は「今まで知っていたことを飛び越えて新しいイメージを創り出すことが、作家のあるいは人間の想像力だ(詳細は上掲)」と述べたが、文化が持っている地方的・特殊なものも踏まえて、いかに普遍的なものに飛び越えていくことができるのか、という私たちの課題に対する大きなヒントを与えてくれた。

本セミナーでは、「文学と風土」というテーマを差し迫った現実的問題を背景に議論してきたが、多くの課題を残しつつも、われわれが今後、いかに国際社会の中で生きていくべきかを考えていくさの糸口になったのではないだろうか。



開館20周年記念募金第一回報告

記念事業として計画している国際館建設のための募金活動を、今春本格的に開始しました。

募金総額は三億五、〇〇〇万円、財界はじめ、各界各位のご賛助を仰ぐべく努力中です。その応募状況は次のとおりで、既にご応募された方々のご芳名を記して心より謝意を表するものであります。

(昭和61年9月10日現在)  
 申込総額 一、四〇一万五、〇〇〇円  
 (内入金済 一、二二二万円)

内訳  
 財界関係 一三三件 九六五万円  
 大学 九件 五二万円  
 一般 六件 一五万円  
 個人 二二二件 三二六九万五、〇〇〇円

●寄付申込者のご芳名 (申込順)

◎財界関係

味の素株式会社殿  
 キッコーマン株式会社殿  
 セントラル硝子株式会社殿  
 日本たばこ産業株式会社殿  
 日本電信電話株式会社殿  
 株式会社伊藤園殿

◎個人

五、〇〇〇円 日本大学教授 笠原正成殿  
 五、〇〇〇円 日本大学教授 原田行男殿  
 三〇〇〇〇円 日本女子体育大学 講師 江幡玲子殿  
 五、〇〇〇円 元東京京外国語大学教授 竹内与之助殿  
 五、〇〇〇円 成蹊大学教授 永野 賢殿  
 一〇〇〇〇円 慶応義塾大学教授 山本 登殿

◎大学

ソニー株式会社殿  
 日清製粉株式会社殿  
 日本アイ・ビー・エム株式会社殿  
 サントリー株式会社殿  
 株式会社ブリヂストン殿  
 ビール協会殿  
 株式会社丸井殿  
 成城大学殿  
 明治学院大学殿  
 東京経済大学殿  
 学習院大学殿  
 杏林学園殿  
 東海大学殿  
 上智学院殿  
 武蔵大学殿  
 国際基督教大学殿  
 株式会社中央公論事業出版殿  
 株式会社トーカイ横浜支店殿  
 八南交通株式会社殿  
 酒井薬品株式会社殿  
 株式会社アイワールド殿  
 株式会社千社正和電設殿

◎一般

五、〇〇〇円 東京大学助教 鈴木 博殿  
 五、〇〇〇円 お茶の水キリスト教会牧師 小幡史朗殿  
 五、〇〇〇円 国際基督教大学教授 讃岐和家殿  
 一〇、〇〇〇円 慶應義塾大学教授 池井 優殿  
 一〇、〇〇〇円 順天堂大学教授 関根隆光殿  
 五、〇〇〇円 東京工業大学教授 飯島泰蔵殿  
 一〇、〇〇〇円 一橋大学教授 石 弘光殿  
 三〇、〇〇〇円 青山学院大学教授 田島恵見殿  
 一〇、〇〇〇円 明治学院大学長 森井 眞殿  
 一〇、〇〇〇円 東京外国語大学教授 原 誠殿  
 五、〇〇〇円 立教大学講師 平木典子殿  
 一〇、〇〇〇円 東京外国語大学教授 北村 甫殿  
 五、〇〇〇円 専修大学教授 麻島昭一殿  
 一〇、〇〇〇円 中央大学教授 原田富士雄殿  
 一〇、〇〇〇円 日本大学教授 田原虎次殿  
 五、〇〇〇円 一橋大学教授 山澤逸平殿  
 一〇、〇〇〇円 慶應義塾大学教授 小池生夫殿  
 一〇、〇〇〇円 武蔵工業大学長 石川 馨殿  
 一〇、〇〇〇円 筑波大学教授 島岡 丘殿  
 一〇、〇〇〇円 武蔵大学教授 伊能 敬殿  
 五、〇〇〇円 東京慈恵医科大学 謙輔殿  
 三〇、〇〇〇円 東京都立大学教授 小池 滋殿  
 一〇、〇〇〇円 元武蔵工業大学長 山田良之助殿  
 一〇、〇〇〇円 東京工業大学教授 谷口汎邦殿  
 一〇、〇〇〇円 東洋大学教授 園田義通殿  
 一〇、〇〇〇円 ミシガン州立大学大学院生 今井哲哉殿  
 五、〇〇〇円 東京大学教授 田中英夫殿  
 三〇、〇〇〇円 今井商事株式会社 今井 栄殿  
 五、〇〇〇円 立教大学教授 小西正捷殿  
 五、〇〇〇円 東京都立大学教授 高橋勇悦殿  
 一〇、〇〇〇円 東京大学教授 寿岳 潤殿  
 一〇、〇〇〇円 国際通信工業(株)社長 塩見利夫殿  
 一〇、〇〇〇円 東京女子大学教授 福田一郎殿  
 五、〇〇〇円 法政大学教授 伊藤玄三殿  
 五、〇〇〇円 一橋大学教授 小野 旭殿  
 五、〇〇〇円 津田塾大学教授 江尻美穂子殿  
 一〇、〇〇〇円 淑徳大学長 那須宗一殿  
 二〇、〇〇〇円 法政大学教授 秋田成就殿  
 一〇、〇〇〇円 早稲田大学教授 川原栄峰殿  
 一〇、〇〇〇円 東京工業大学教授 熊田慎宣殿  
 一〇、〇〇〇円 東京理科大学教授 近藤 保殿  
 一〇、〇〇〇円 東海大学教授 千葉正士殿  
 一〇、〇〇〇円 東京都立大学名誉教授 大田秀通殿  
 二〇、〇〇〇円 東京女子大学教授 高村多賀子殿  
 五、〇〇〇円 東京大学教授 乾 崇夫殿  
 二〇、〇〇〇円 神奈川大学教授 田村 献殿  
 一〇、〇〇〇円 青山学院大学教授 羽田三郎殿  
 五、〇〇〇円 成城大学教授 森岡清美殿  
 五、〇〇〇円 東京都立大学教授 峰岸純夫殿  
 五、〇〇〇円 東海大学医療短期大学 山本よしゑ殿  
 一〇、〇〇〇円 跡見学園女子大学教授 橋本研一殿  
 一〇、〇〇〇円 松村石油会長 松村信治郎殿  
 五、〇〇〇円 駒澤大学教授 寺中良二殿  
 五、〇〇〇円 早稲田大学教授 中村英雄殿

一〇,〇〇〇円	東京学芸大学名誉教授	二〇,〇〇〇円	お茶の水女子大学教授
五,〇〇〇円	京都大学名誉教授 松原元一殿	二〇,〇〇〇円	澤島侑子殿
五,〇〇〇円	日本女子大学教授 平澤 興殿	一〇,〇〇〇円	元早稲田大学総長 村井資長殿
二五,〇〇〇円	武蔵大学教授 一番ヶ瀬康子殿	五,〇〇〇円	前大セミナー・ハウス 専務理事 西田亀久夫殿
一〇,〇〇〇円	住友金属鉱山相談役 村田晴夫殿	五,〇〇〇円	お茶の水女子大学教授 島田淳子殿
一〇,〇〇〇円	東京大学教授 田中外次殿	五,〇〇〇円	大学入試センター教授
一〇,〇〇〇円	村上陽一郎殿	五,〇〇〇円	筑波大学教授 中島直忠殿
一〇,〇〇〇円	上智大学教授 山本義治殿	一〇,〇〇〇円	元東京外国語大学長 高橋恒郎殿
五,〇〇〇円	東京大学教授 内田祥哉殿	五,〇〇〇円	小川芳男殿
一〇,〇〇〇円	日本女子大学教授 熊坂敦子殿	五,〇〇〇円	ソニー(株)井深大氏夫人
一〇,〇〇〇円	前成蹊大学長 朝倉孝吉殿	一〇,〇〇〇円	明治学院大学教授 井深淑子殿
五,〇〇〇円	帝京大学教授 水野伝一殿	一〇,〇〇〇円	神保信一殿
一〇,〇〇〇円	東京学芸大学教授 宮腰 賢殿	一〇,〇〇〇円	普通士学園理事長
三〇,〇〇〇円	立教女学院短大教授 宮本瑞夫殿	一〇,〇〇〇円	布川角左衛門殿
一〇,〇〇〇円	東京大学教授 西川 治殿	一〇,〇〇〇円	東京大学教授 尾本恵市殿
一〇,〇〇〇円	東京大学名誉教授 高瀬文志郎殿	五,〇〇〇円	上智大学教授 市川邦彦殿
一〇,〇〇〇円	日本女子大学名誉教授 野見山不二殿	五,〇〇〇円	三菱化成生命科学研究所長 今堀和友殿
一〇,〇〇〇円	専修大学長 小田切美文殿	一〇,〇〇〇円	東京都立商科短期大学長 久留都茂子殿
一〇,〇〇〇円	元中央大学長 井上達雄殿	二〇,〇〇〇円	中富商事重役 中富光国殿
一〇,〇〇〇円	前法政大学総長・参議院議員 中村 哲殿	二〇,〇〇〇円	お茶の水女子大学長 藤巻正生殿
一〇,〇〇〇円	早稲田大学教授 田中弥寿雄殿	一〇,〇〇〇円	白根開善高校 本吉修二殿
五,〇〇〇円	筑波大学教授 小田 晋殿	一〇,〇〇〇円	セーラー万年筆社長 坂田正三殿
一〇,〇〇〇円	東京学芸大学助教授 金谷 憲殿	五,〇〇〇円	近畿大学教授 大原栄一殿
五,〇〇〇円	京都大学教授 一松 信殿	一〇,〇〇〇円	順天堂大学教授 中島 章殿
五,〇〇〇円	学習院参事 原島幸太郎殿	三〇,〇〇〇円	理化学研究所理事 森脇大五郎殿
一〇,〇〇〇円	杉野女子大学教授 田村皖司殿		
五,〇〇〇円	S・A・Sコーポレーション代表 佐藤音彦殿		
五,〇〇〇円	横浜国立大学教授 武藤義夫殿		
一〇,〇〇〇円	元東京外国語大学長 鐘ヶ江信光殿		
二〇,〇〇〇円	東京学芸大学長 関 四郎殿		

### 昭和61年度共同セミナー委員会、新陣容でスタート

一〇年に亘る岡宏子委員長のあとを受

竹内 啓	東京大学教授	副委員長	江沢 洋	学習院大学教授
小田 晋	筑波大学教授	委員	小浪 充	東京外国語大学教授
尾本恵市	東京大学教授			
戸沼幸市	早稲田大学教授			
山下幸夫	中央大学教授			
青柳清孝	国際基督教大学教授			
池上嘉彦	東京大学教授			
栗原 彬	立教大学教授			
杉田弘子	武蔵大学教授			
鈴木一郎	津田塾大学教授			
鈴木和子	日本女子大学教授			
中西 進	筑波大学教授			
室田 武	一橋大学助教授			
合田周平	電気通信大学教授			
鴨 武彦	早稲田大学教授			
川端香男里	東京大学教授			
坂本百大	青山学院大学教授			
中野 収	法政大学教授			
〇坂部 恵	東京大学教授			
〇桜井哲夫	東京経済大学助教授			
〇袖井孝子	お茶の水女子大学助教授			

### 第1回共同セミナー委員会

86年6月9日/私学会館

〔出席者〕 小田晋、尾本恵市、小浪充、江沢洋、山下幸夫、栗原彬、鈴木和子、竹内啓、中西進、室田武、鴨武彦

(敬称略)

他にハウス側から中川館長、飯田名誉館長、立野専務理事、企画室スタッフ3名が出席。

〔主な議事〕

- (1) 委員長の選出と副委員長の指名
- (2) 昭和60年度教育プログラムの総括(企画室)

参加状況の分析、とくに共同セミナーの各回平均の参加者数が五〇人にまで減少したことに對して、重点的な募集方法の必要性が指摘された。

- (3) 次年度プログラムについて
- (4) 第10回大学合同セミナー(87年6月)を三戸公立大教授の退官記念セミナーとしたい旨の企画室提案が承認された。

他に共同セミナーのテーマ案をめぐり活発な議論が展開された。

(5) 共同セミナーの今後のあり方について

小冊子「大学セミナー・ハウスと私」(企画室編)に収められている参加学生の感想文やアンケートから、共同セミナーの意義を再確認し、参加者の減少傾向の打開策を重要課題として、今後検討していくことになった。

# 青葉の中のオープン・ハウス

千人会の集いをかねて 岡宏子先生を主賓に

86年7月6日 / 大学院セミナー館

雑木林が室内に緑の光を投げる大学院セミナー館に、談笑の輪がいくつも広がった。千人会の集いをかねて催されたオープン・ハウスの主賓は、一〇年に亘り共同セミナー委員長として、ハウスの諸活動にご尽力下さった岡宏子先生である。聖心女子大学をこの3月で定年退職され、委員長を退任された岡先生への感謝の会でもあった。好天に恵まれた日曜日の午後、折しも衆参同日選の投票日と重なって欠席された方も少なからずおられたが、第7回大学院共同セミナーの参加者も加わり、参加者はにぎやかに二部からなるプログラムを楽しんだ。

閉会に当って、岡先生は次のように挨拶をされ、次代に夢を託された。



ティー・パーティー (大学院セミナー館)

「私の今の気持ちは、大交おもはゆいという一言です。このようなことをしていただく気はなかったので、宇野先生にだまされた、という感じがあります。私は全くのさしみのツマで、それをタネに



挨拶に立たれる岡宏子先生、後方は司会の宇野重昭氏の

集まるのだからいいだろうと言われまして、そのつもりで出てまいりましたら、飯田名誉館長から過分のおことばを頂戴し、皆様方からも温かいねぎらいのおことばをいただきました。私は、セミナー・ハウスが誰か必要とするというときに、その場に立たされたから、やるだけのことをやっただけのごさいますして、私よりも頭も口も回る竹内先生が委員長を引き受けて下さいますし、千人会の皆様方や共同セミナーで一緒にした学生の方々が、やはりこの丘を愛し盛り立てていくことになるのではないかと思います。

す。皆様のお心の中に、「共同」ということの芽が育っていくことを願っています。私の感謝のことばにかえたいと思います。」

## 岡 宏子先生へのメッセージから

▼私は、最後の二年間を共同セミナー委員会で一緒にさせていただき、岡先生がセミナーの企画を盛り上げるため委員長長ぶりを発揮されているのを拝見してきただけですが、どういうわけか私が委員長をやれということになってしまっ、名委員長のあとを継ぐ私としては、いささか迷惑している次第です。

◇ 東京大学教授 竹内 啓氏

▼私は71年から共同セミナー委員をつとめ、副委員長からやがて委員長のお鉢が廻ってくるころまで来たのです。なんとか逃れる方法はないか、と考えているところに岡先生が委員になられた。飯田先生とご相談しまして、ちょうど国際婦人年であるからよろう、ということになりました。あとで岡先生から、女性だから選んだとは何事か、とお叱りを受けているのです。その後、運営委員として一緒にハウスのことをご相談してきました。岡先生が気にかけておられる一つのこととは、千人会を充実させたいということです。私も全く同感で、飯田先生が個人的な関係で開拓された千人会を、ハウスをよりよくするために、更に充実した

### ●プログラム●

●第一部 講演 14時~15時

「人間形成過程と犯罪性の問題」

聖心女子大学名誉教授 岡 宏子氏

(司会) 東京大学教授 竹内 啓氏

●第二部 ティー・パーティー 15時半~16時半

(司会) 成蹊大学教授 宇野重昭氏

挨拶 館長 中川秀恭氏

岡先生へのメッセージ 名譽館長 飯田宗一郎氏

岡先生へ記念品の贈呈 千人会員 進藤トク氏

乾杯 早稲田大学教授 川原栄峰氏

ヴァイオリン独奏 尾崎陽子氏

マズナー作曲「タイスの瞑想曲」

出席者の紹介

欠席者からのメッセージ紹介

朗読 日大芸術学部・語り部の会

「外郎売」 「大学院セミナー・ハウス

讃歌」

スピーチ 東京工業大学名誉教授 内藤 正氏

慶応義塾大学教授 山岸 健氏

◇ 成蹊大学教授 宇野重昭氏

▼この一〇年間、いろんな場所で岡先生と親しい交わりをいたしました。このことは聖書のヨハネ伝にある「風は意のままに吹く、人そのいづこより来たり、いづこに去るかを知らず。すべて霊あるものかくの如し」の聖句を思い起こさせるのです。岡先生はこの意味することを理解されている方であり、一〇年間よくぞ委員長をやって下さったという感謝の気持ちでいっぱいです。

名譽館長 飯田宗一郎氏 (12頁3段目に続く)

# 千人会

'86年6月〜8月

◆現在会員一、五三四名(実会員数)  
(通算入会者一、七八〇名)

◆新しく会員となられた方々  
5名(第84回報告(申込順))

- 東京電力(株) 花形 将司殿
- 国際教育交流協会 岡田 英和殿
- 学陽書房 大江 正章殿
- 藤田学園保健衛生大学 石川 道夫殿
- 弁護士 林 肇 殿
- ◆会費ありがとうございました  
竹村猛、板倉讓治、福田延衛、竹内喜夫、田中未来、佐藤進、古畑和孝、鈴木二郎、長岩寛、松井源吾、野沢浩、望月継治、荒井基、香村欣二、川名明、中山昌、中村幸安、今井義夫、西川治、小倉充夫、島田淳子、宮崎照子、藤野登、柴田勇造、見田宗介、安宅光雄、佐久間まゆみ、北野美枝子、西澤宗英、鶴児和子、深海博明、江沢洋、今堀和友、柴田恭二、大内力、原田富士雄、鈴木一郎、鈴木千歳、川田侃、仁科雄一郎、吉田幸弘、福山直美、島海俊宏、和田英一、二谷貞夫、徳末愛子、太田秀通、名東孝二、岡田正弘、藤井耕一、臼井久和、三浦徳弘、朱牟田夏雄、長清子、金子晃、市井三郎、川添利幸、中野スミ子、伏見康治、吉松藤子、石川信男、川内脩司、長谷川幸男、栗林恒雄、村瀬曼、柳下勇、辻達也、中村浩三、相澤忠一、大畑篤四郎、柴田政利、慶谷伸代、林俊一、阿部齊、山西貞、石井進、廣東偉介、川田雄一、高橋勇徳、常行敏夫、讃岐和家、永井裕、和田義信、鈴木務、松平文朗、西川大二郎、有賀弘、橋谷卓成、入江和生、村上光雄、荒井敏、黒田道雄、谷下松、内山尚三、三橋文雄、中村進、嶺哲之助、三和治、奥村敏恵、梅沢豊、伊藤清和、柏木恵子、林潔、松島恵、小池滋、土田美芳、綿引二郎、藤原領男、藤平重雄、田島恵児、金谷恵、中川一朗、小池生夫、栗原尚子、岡田英和、篠田長世、角瀬保雄、橋本研一、宮本瑞夫、吉田美穂子、米村貞蔵、山

井湧、児玉久雄、坂田道太、大熊徹、長浜洋一、矢部章彦、三輪公忠、秋山慶、奥田夏子、笹森健、三宅彰、山口重克、橋本智、太田善磨、原誠、菊池雄二、五十嵐武士、稲田拓、武澤信一、鹿島健次、永井博史、宮川俊彦、山本澄子、十代田知三、小西悟、児玉昭太郎、大吉芳彦、山本茂、菊池百合、佐藤誠三郎、石川馨、浅井邦二、村松暎、大河内繁男、平井久、岡本剛、宅間宏、小沢重男、原田行男、井上孝、岡村文子、岡岡昭夫、合田周平、志賀英、花鳥重春、岡本哲治、村田光二、荻原洋太郎、宮野三郎、石川道夫、林肇、伊藤一雄、渡辺昭夫、山本武彦、加藤栄一、若槻泰雄、白濱謙一、田村恭、後藤光一郎、古本捷治、石田雄、田中庄蔵、高村象平、中川重雄、福山仙樹、大福族生、大野泰雄、松村信治郎、中島文夫、山本襄治、石井竹松、原島幸太郎、川原啓美、市川博、下田弘、片山清一 (敬称略)

### ◆千人会員からのたより

国際化の時代、貫セミナー・ハウスの学的知的交流のご貢献を一層期待申し上げます。  
東海大学教授 秀村欣二

創立以来お世話になっていきます。八王子の近來の発展、殊に文教中心の都市に成長し、セミナー・ハウスの先鞭に敬服しています。  
日白学園女子短期大学元教授 中山 昌

お蔭様にて元気で還暦を迎えました。以後A会員でお願いします。  
都立立川短大図書館長 吉田幸弘

この誕生日で満八十歳、よく生きて来たと思います。記念に増発とも考えましたが、別途寄付の方で少々奮発することになりました。  
帝京大学教授 朱牟田夏雄

健康で誕生日を迎えたことに感謝しつつ、会費をお送り致します。千人同心がますます多数になりますよ折って居ります。  
東京学芸大学名誉教授 三橋文雄

なお、ティー・パーティーの終了後、千人会員有志による話し合いが交友館でもたれた。会員のための交流プログラムの促進、財政的援助のより強固な基盤作り、ハウスと千人会との有機的なつながり等々の話題が出され、今後もハウスの活動の活性化に千人会が果たしうる可能

ねたいと思います。残り少ない公務員生活で有意義に過したいと考えております。  
広島大学学生部次長 嶺哲之助

別便にて拙著をお送りします。三年前の出版のものが、その後比較的好意的に学界で受け入れられておりますので寄贈させて頂きます。  
青山学院大学教授 田島恵児

今年はBよりCに変更させて頂きました。やがて七〇を迎える老生ですが、国の内外に大いに活躍しています。ご繁栄を祈ります。  
計量計画研究所理事長 井上 孝

## 寄付金

'86年3月〜8月

### ●教育プログラム資金

- 五〇、〇〇〇円 第135回大学共同セミナー 指導教授 同殿
- 三〇、〇〇〇円 第136回大学共同セミナー 指導教授 武田清子殿
- 一九、七〇六円 第137回大学共同セミナー 参加者一同殿
- 一三、六六六円 第138回大学共同セミナー 参加者一同殿
- 一八、〇五〇円 第7回大学院共同セミナー 参加者一同殿
- 五、〇〇〇円 第7回大学院共同セミナー 指導教授 小田 晋殿

性を模索していくことを、相互に確認し合った。

最後に、このオープン・ハウスの企画から当日の進行の全般にわたり、運営委員会副委員長・宇野重昭氏が多大の労をとられたことを記して謝したい。

### ●一般寄付金

- 一〇、〇〇〇円 駒澤大学教授 松本皓一殿
- 三、〇〇〇円 青山学院大学講師 牛丸 聡殿
- 三、〇〇〇円 東京薬科大学新歓実行委員会 同殿
- 三六、〇〇〇円 明星大学通信教育部夏期スクーリング受講生一同殿
- 四、三〇〇円 日本神の教会連盟殿
- 一〇、〇〇〇円 東京理科大学クライツィグゼミ殿
- 一〇、〇〇〇円 第14回十大学合同セミナー 参加者一同殿
- 四、〇〇〇円 錯体化学夏期懇談会若手の会 同殿
- 二、五〇〇円 学習院大学児玉ゼミ一同殿

### ●植樹

- 八重桜三株 東海大学医学部新入生研修会 同殿
- さるすべり一株 都立大学遺伝ゼミ殿
- オオムラツツジ 東京学芸大学文章研究ゼミ殿
- はなみずき一株 東京建築設計監理協会建築セミナー一同殿
- しゃら一株 日本女子大学附属高等学校国際基督教大学心理学サマールセミナー殿

### ●現物寄付

- 椎の木、樅の木 ホロニックデンタルリサーチ殿
- 自作の絵画 国学院大久我山高校講師 森下展行殿

# 業／務／通／信

昭和61年6・7・8月  
夏の多彩な合宿研修から

春から夏にかけて、ハウスは最盛期である。春はフレッシュマンで溢れ、夏は休暇を利用しての多様な研修に、国内外から集う人々でにぎわう。宿舍の稼働率は、春3月から夏8月までの六ヵ月間、連続して六〇%を上回り、盛夏8月は七八%に達した。

●新入生合宿には今季延べ九、六〇〇人が参加

新入生セミナーはこの三ヵ月にも行われた。クラス単位以上の規模の合宿は別表に示すとおりで、計一五件(九校)、延べ二、八三六人。前号記載の4・5月分と合わせると、今季五ヵ月間にハウスで実施された新入生合宿は計六一件(三一校)、参加者数は八、四二七人(うち教職員七六三人)、延べ九、六一九人(八四三人)となる。

なお、6月以降では東京電機理工学部六学科(三グループ・延べ六〇四名)と今春開校の新準協力会員校・都立医療技術短大(二二二名)が初めてハウスでのオリエンテーションを試みられた。

●この夏、二つのグループがハウス利用「20周年」を祝う

7月5日は開館記念日——この日ハウスは21歳の誕生日を迎えた。開館以来の利用者は延べ九一万五、〇〇〇人に達し、グループ数は二万を超えた。そして、次にご紹介する二つのグループが、この夏の合宿で二〇年目をマークした。

お茶の水女子大理工・家政、文教育各学部一九学科の新入生セミナー(計五〇一名)は、'67年以來連続二〇年の実施。毎年、前後二班に分かれての「全群使用」による合宿が続いている。今回は前・後班とも夕食時に、「20周年記念」を祝った。また、日本女子大附属高校の高校生活研究セミナー(六五名)は通算三四回で、今年二〇年目。同高校は、ハウスの創立者のお一人で日本女子大大学学長であられた故・上代たの先生とご縁から、開館当初より「会員校附属」として利用。開会式後に20周年記念植樹祭が組まれた(写真15頁に別掲)。

●十大学合同セミナーが「共同宣言」を発表

恒例の十大学合同セミナー(国際関係論)が今年も6月末に開催された。参加者は一八八名。'73年以來の一四回目。今年も見事な自主運営で大学間交流の実を上げたが、今回は主題「日本の対アジア外交——アジアにおける日本の国際的役割——」についての討議の成果を、最終日に『共同宣言』の形で発表したことが

昭和61年6・7・8月  
新入生オリエンテーション実施状況

学 校 名	参加者数
●6月	
東京農工大学・農業工学科	32(9)
白梅学園短期大学・保育科Aグループ	*163(15)
白梅学園短期大学・保育科Bグループ	*145(12)
東京都立大学・数学科	66(11)〈29〉
職業訓練専門学校	293(51)
東京電機大学・経営工学科、建築工学科	190(15)
東京電機大学・数理工学、産業機械工学科	194(10)
東京電機大学・応用電子工学科、情報科学科	220(20)
早稲田大学・建築学科	229(10)〈17〉
東京都立大学・法学部	52(4)〈12〉
●7月	
東京都立医療技術短期大学	222(51)
お茶の水女子大学・理・家政学部	248(20)
お茶の水女子大学・文教育学部	253(23)
総合電子専門学校	165(13)
●8月	
東京都立大学・建築工学科	56(11)〈4〉
計 15グループ	2528(275)〈62〉

(注)参加者数の( )内は教職員、〈 〉内は上級生で、ともに内数。

\*は2泊、他は1泊。実施順。  
4・5月実施分は前号に掲載。

特筆されよう。

●海外からの参加者に好評——緑の中の国際会議

6・7・8の三ヵ月、ハウスは左記の訪日セミナーや国際シンポジウムなど計四グループを迎えた。

① 産業能率大主催「海外学生訪日研修団」(1986 International Seminar on Japanese Business and Management)。日本と日本企業について理解を深めようとする米国一三大学からの六四名(うち教師七名)が五週間の滞日研修プログラムの最初の一日間(6月16日〜26日)を当ハウスで合宿研修した。二年ぶり、三回目の利用。

② 国際教育交換協議会(CIEE)主催「米  
国大学日本研究夏期セミナー」(Japanese  
Business and Society Program 1986)。

米国二九大学からの三九名(うち教師一名)が滞日研修の「総括」合宿(三泊)(8月2日〜5日)。同協議会の利用は三回目。

③ 国際社会開発大学連合(International Consortium for International Social Development)主催第4回国際シンポジウム「平和への開発——その行動戦略」。この連合は第三世界諸国出身で現在アメリカ、カナダの大学で社会開発関連コースの教授職にある者を中心にアメリカで組織されたもの。同シンポジウムは国際社会福祉協議会の世界総会(8月下旬東京新宿で開催)に先がけて「より実質的な研究討議」を行うことを目的に計画され、アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アフリカの計一五カ国から計一一〇名(七六大学)が参集(8月23日〜26日)。日本側組織委員会委員長をつ

とめた東京都立大社会福祉研究室・星野信也教授とハウスとの縁から、「誘致」された本格的国際学会である。

④ ユネスコ・アジア文化センター主催「第19回アジア・太平洋地域出版研修コース」(19th Training Course on Book Production in Asia and the Pacific)。アジア・太平洋地域の出版人養成のために毎年開催されているが、ハウスに迎えるのは久々のことである。今回は児童図書の製作がテーマで、参加者はバングラデシユ、ビルマ、イラン、パキスタン、中国、韓国など一六カ国の作家、詩人、編集者ら一九名。都内で開かれた「子どもの本世界大会」に参加した直後に来泊(8月23日〜25日)された。全員ユニット・ハウスに宿泊して「自然への回帰」を喜び、「この丘に私たちの緑も加えていきたい」と急ぎ記念植樹を申し出られた。

たまたまこれら二つの国際集会③④が同じ時期に泊り合わせることになり、地球共同体の意識を持つ人々の温いコミュニケーションが現出し、双方の参加者の交歓する姿がキャンパスのあちこちに見られた。

「この自然の中ででの共同の生活体験を通じて、知的交流に欠かせぬ」共通の基盤が創られ、大規模な大会ではとても望めないより実質的な意見交換・研究討論が可能となった」とは、双方の関係者が異口同音に指摘されたことであった。

参加者からも感想文が寄せられているので、写真とともにそのいくつかを紹介しておきたい。



(1) 講堂での討論風景

### (1) INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON INTERNATIONAL SOCIAL DEVELOPMENT

The Seminar House was ideal place for the symposium. It provided adequate physical facilities for accommodation and meetings. It offered a fascinating natural setting for intellectual discussion and social interaction. The campus is not affected with the hastles of urban life. Its environment is most stimulating for reflection and scholarly dialogues. The staff is gentle, courteous and most cooperative. The participants were impressed with the quality of experience at the Seminar House and returned to their countries with very positive feeling.

**Rama Pandey**, Professor, Univ. of Minnesota and Co-Chairperson of Program Planning Committee

### (2) INTERNATIONAL SEMINAR ON JAPANESE BUSINESS AND MANAGEMENT

The quiet peaceful woods and one's needs met by courteous staff serve to unfold the mind to profound thoughts about meaning. A moving and memorable experience! Keep this place forever.

**George Westacott**, Professor, State Univ. of New York at Binghamton

\*

This facility reminds me of home in Oregon. I really enjoy the beautiful landscaping. Everyone of the staff members has been very friendly and polite, even considering the cultural differences. The food has been excellent, exposing me to a new experience with almost every meal. In my opinion, "Plain Living" does not suitably describe the Inter-University Seminar House. This has been a spiritually lush experience for me, one I will treasure for years to come. I am sorry that I do not have adequate means to express my appreciation for the tranquility and kindness offered to me here.

**Joel Slavin**, Univ. of Oregon

## 夏の国際集会から



(2) 遠来荘の茶道体験

(3) 緑の中で交流する作家たち



### (3) TRAINING COURSE ON BOOK PRODUCTION IN ASIA AND THE PACIFIC

1. Unforgettable days in Japan.
2. Most enjoyable journey.
3. Ever green and flowers blooming.
4. Peaceful environment, sweet smelling wind.
5. Good feeding and nice meals.
6. Happy sleeping in place of quiet.
7. Friendship dealing and mass thinking.
8. Getting the way to solve the problems.

**Cho Cho Than**, Assistant Editor/Poet/ Writer, Burma

# 利用状況

6月

● 11月2日回利用  
\* 11月3日回利用  
日帰り、個人利用を除く



高校生活研究セミナー20周年記念植樹祭。——じゃらの木を植える日本女子大附属高校の生徒たち(第6群・上代池)

- 東京農工大学農学部新入生合宿
- オリエンテーション
- 東京学芸大学助教 沢崎 真彦
- 白梅学園短期大学保育科新入生オリエンテーション\*
- 中央大学助教 関口 定一
- 成蹊大学助教 朝倉 孝吉
- 津田塾大学生協同組合
- 東京都立大学数学科交流合宿
- 東京理科大学助教 沖塩 莊一郎
- 東京工業大学助教 小林 彬
- 立教大学助教 北岡 伸一
- 東京電機大学経営工学科・建設工学科新入生オリエンテーション
- 東京電機大学数理学科・産業機械工学科新入生オリエンテーション

(59グループ、延四、六八五人)

- 東京電機大学応用電子工学科・情報科学科新入生オリエンテーション
- 和田 英一
- 早稲田大学助教 成田誠之助
- 早稲田大学建築学科新入生オリエンテーション
- 東京学芸大学哲学研究室
- 一橋大学助教 竹内 啓一
- 長谷川 幸男
- 早稲田大学助教 河村 望
- 中央大学経済学会 宮田 彬
- 東京都立大学助教 金田 行幸
- 法政大学助教 師岡 孝次
- 東海大学助教 日向野 幹也
- 東京都立大学助教 堀田 牧太郎
- 共立女子大学助教 田村 剛
- 明治学院大学助教 宇佐美 滋
- 東京外国語大学助教 狩野 紀昭
- 早稲田大学助教 福島 健
- 慶応義塾大学助教 義久 義久
- 職業訓練大学院新入生合宿セミナー
- 東洋大学助教 島袋 嘉昌
- 東京YWCA専門学校英語科
- 産業能率大学海外学生訪日研修団
- 都留文科大助教 大島 真
- NHK学園高等学校生徒会
- 日本女子大学附属高等学校高校生活研究セミナー
- 国際経済商学学生協会
- 第14回十大学合同セミナー
- 日本建築学会
- 日本映像学会
- 建築セミナー
- 高橋聖書集会
- フィールド・コンピューター・サーピス
- 酒井薬品\*
- ベスト外国語学校
- 京王ストア
- チャンピオン美容室
- 中野輸送
- 久光製菓
- 東芝日野工場
- 日本電子計算
- 富士フアコム制御

7月

日電アネルバ  
(105グループ、延五、一一四人)

- 東京都立医療技術短大泊泊交流研修学習院大学助教 江沢 洋
- 駒沢大学助教 谷敷 正光
- 東京外国語大学助教 小沢 重男
- 慶応義塾大学助教 榎谷 昭彦
- 慶応義塾大学助教 山田 辰雄
- 国際基督教大学助教 都留 春夫
- 国際基督教大学心理夏季セミナー
- 横浜国立大学助教 佐々木 弘明
- 早稲田大学助教 平澤 茂一
- 東京都立大学助教 金子ハルオ
- お茶の水女子大学理・家政学部新入生セミナー
- お茶の水女子大学文教育学部新入生セミナー
- 武蔵大学講師 村田 晴夫
- 小和田 恒
- 恵泉女子学園短期大学英文学科総合講義「国際・セミナー」
- 東京都立大学助教 高見沢 邦郎
- 杏林大学講師 永井 健晴
- 早坂 泰次郎
- 立教大学助教 早坂 泰次郎
- 共立女子大学自主勉強会
- 東京大学助教 栗原 敏子
- お茶の水女子大助教 栗原 敏子
- 東京理科大学助教 石井 力
- 川口 健一
- 早稲田大学法研読書会
- 早稲田大学助教 川原 栄峰
- 駒沢大学助教 石川 力山
- 東京都立大学臨床心理研究会
- 明治大学フォーラム
- 中央大学経理研究所
- 電気通信大学助教 長谷川 伸
- 学習院大学助教 佐竹 義昌
- 中央大学助教 池田 正孝
- 武蔵大学助教 佐野 貞芳
- 学習院大学助教 尾玉 晃
- 駒沢大学助教 寺中 久雄
- 東京都立大学助教 河村 良二
- 望
- 早稲田大学コンツェルト
- 早稲田大学美術研究会
- 津田塾大学講師 柴 宜弘
- 津田塾大学助教 門脇 卓爾
- 千葉商科大学講師 影山 信一
- 慶応義塾大学講師 中込 昌孝
- 上智大学助教 奥田 健二
- 東京大学助教 馬場 修一
- 法政大学助教 竹田 茂夫
- 明治学院大学助教\* 増田 茂樹
- 埼玉女子大学助教 山口 和孝
- 共立女子大学助教 藤澤 房俊
- 東京理科大学II部物理研究室
- 東京理科大学助教 狩野 紀昭
- 青山学院大学講師 宮尾 依子
- 東京学芸大学助教 松岡 栄志
- 立教大学講師 小池 洋一
- 東京都立川短期大学・同商科短期大学茶道部 秋山 洋一
- 立教大学助教 大友 立也
- 立教大学助教 高橋 和男
- 津田塾大学講師 羽場 久穂子
- 中央女子大学講師 山口 和孝
- 明星大学通信教育部 内藤 純郎
- 横浜市立大学助教 小柴はるみ
- 東京芸術大学助教 山口 和子
- 創価大学助教 山口 和子
- 総合電子専門学校 松尾 秀雄
- 名城大学助教 堀野 定雄
- 神奈川大学助教 堀野 定雄
- 京浜女子大学湘南生物研究会自然観察会
- 独協大学助教 林 俊一
- 第7回理生共同セミナー
- 植物学理若手の会
- 日本ワイルド協会
- 国際キャリアセンター
- 朝日カルチャーセンター
- 生活時間調査研究会
- 国際教育交流協会
- 文学教育研究者集団
- クワエリティブ・レンタルリサーチ
- 「富沢賢治」読書会
- 日本分光工業
- 日本電気

8月

(106グループ、延六、五三九人)

- 千野製作所\*
- 東芝計装エンジニアリング
- 日本アビオニクス
- 日本フードサービス協会
- 酒井薬品
- 積水ハウス
- 日本生産性本部
- 富士フアコム制御
- 中野輸送
- 小西六写真工業
- 東芝
- アメリカ銀行
- 法政大学講師 武川 正吾
- 法政大学哲学会 小川 徹
- 法政大学助教 寺中 良二
- 駒沢大学助教 見田 宗介
- 法政大学助教\*
- 法政大学社会科学方法論研究会 富澤 宗一
- 東京理科大学助教 大澤 綱一郎
- 東京理科大学助教 富澤 宗一
- 学習院大音楽愛好会リコーダーゼミ
- 法政大学プラトン研究会
- 共立女子大学英語劇研究会
- 東京都立大学助教 長倉 康彦
- 学習院大学助教 高橋 利宏
- 成蹊大学助教 肥後 和夫
- 中央大学経理研究所 中央大学ITC
- 中央大学通信教育部 肥後 和夫
- 明星大学通信教育部 筑波大学助教 台 利夫
- 日本女子大学助教 佐藤 進
- 慶応義塾大学助教 三浦 和男
- 慶応義塾大学助教 加藤 寛
- 東京学芸大学自然文化誌研究会
- 国際基督教大学助教 村木 正武
- 早稲田大学助教 永野 賢
- 東京学芸大学名誉教授 上野 理
- 千葉大学助教 田中 国昭
- 東京工業高等専門学校日豪学生交流実行委員会 六本 佳平
- 東京大学助教 木村尚三郎

# 予 告

## ●第137回大学共同セミナー

主題 生命倫理を考える  
 期日 1986年11月14日～16日(金～日)  
 募集人員 70名(社会人も可)

### ◇講義とシンポジウム

- I. 先端医療技術  
 東京大学医学部医用電子研究施設教授 古川俊之氏
- II. 遺伝子操作  
 東京大学医学部教授 村松正実氏
- III. 生命倫理学の基礎  
 千葉大学文学部教授 加藤尚武氏
- IV. 自己決定権の尊重と生命倫理  
 明治大学法学部助教授 新美育文氏
- V. 生命倫理とエコ・テクノロジー  
 電気通信大学教授 合田周平氏
- VI. 生命哲学の第三世代  
 ——「人間性」を再考する——  
 青山学院大学経済学部教授 坂本百大氏

## ●第138回大学共同セミナー

主題 平和と軍縮を求めて  
 ——人類が共に生きる条件——  
 期日 1986年12月5日～7日(金～日)

### ◇全体講義

- 軍事的研究・開発と科学者  
 明治学院国際平和研究所長 豊田利幸氏

### ◇ゲスト講演

- 地球文明時代の到来  
 三菱総合研究所相談役 中島正樹氏

### ◇セクション演習

- A. 西ヨーロッパにおける反核運動と平和  
 中央大学法学部教授 高柳先男氏
- B. 大学生のための平和デッサン教室  
 東北大学法学部助教授 大西 仁氏
- C. ソ連社会の改革と平和——ソ連の国際観の変貌——  
 成蹊大学法学部教授 下斗米伸夫氏
- D. 米ソの核軍拡競争とSDI——軍備管理と軍縮の問題点——  
 早稲田大学政経学部教授 鴨 武彦氏
- E. 同盟と脱同盟——ニュージーランドと日本を考える——  
 国際基督教大学教養学部助教授 最上敏樹氏

## ●第139回大学共同セミナー

主題 巨大技術と人間(仮題)  
 期日 1987年3月13日～15日  
 運営委員 学習院大学教授 江沢 洋氏  
 一橋大学助教授 室田 武氏  
 青山学院大学教授 坂本百大氏

東京都立大学講師 山川 仁  
 慶応義塾大学英語会スピーチ・セクション  
 武蔵大学英詩研究会 宮腰 賢  
 東京芸芸大学教授  
 東京都立大学建築工学科新入生オリエンテーション  
 明治大学教授 森川八洲男  
 東京理科大学教授 国分 康孝  
 東電学園大学部夏季演習  
 和光学園生協  
 常磐大学教職課程夏期合宿  
 国際武道大学水泳部  
 前橋市立工業短期大学  
 日本医科大学人と生物の研究會  
 東京神学大学夜間講座修養會  
 日白学園女子短大ヤング文化研究部  
 玉川大学園芸学研究室  
 武蔵野音楽大学ESS同好會  
 宮城県立ろう学校  
 都立多摩養護学校  
 都立多摩養護学校  
 神奈川県立百合丘高等学校  
 都立青梅東高等学校

清瀬市立清瀬第五中学校  
 横浜市立新井小学校  
 八王子市立元八王子小学校  
 八王子市立松が谷小学校  
 錯体化学夏期懇談会若手の会  
 国際教育交換協議会CJBS P  
 錯体化学夏期懇談会一般の会  
 日本国際連合学生連盟  
 理論化学シンポジウム  
 全国学生M E研究会  
 国際社会開発シンポジウム  
 東京音楽鑑賞サークル連合  
 在日本韓国留学生連合會  
 数学基礎セミナー  
 日本神の教會連盟  
 婦人労働問題研究会  
 文学教育研究者集団  
 井上研修所  
 ボランティア・コワイヤ  
 子どもと作る生活文化研究会  
 ホロニック・デンタル・リサーチ  
 音楽情報科学研究会  
 大学セミナー・ハウス卒業生の集い  
 東京授業研究会

## 第132回大学共同セミナーが出版物になりました

書名 日本文化の深層を考える  
 著者 網野善彦・塚本学・坪井洋文・宮田登

発行所 日本エディタースタール出版部  
 発行日 1986年7月25日

英語教育協議會  
 東京都高等学校英語研究会  
 地域遺伝相談研究会  
 文流(イタリア語夏季集中講座)  
 エネスコ・アジア文化センター  
 早稲田大学システム科学研究所  
 八王子たのしい授業研究会  
 国際交流サービス協会  
 モラロジー研究所  
 田村電機製作所

定価 一、四〇〇円

内容 性と妖怪、イモとコメー日本民俗文化の多元性、中央と地方、公と私——前近代の自由と隷属、日本文化の深層を考えるブックガイド、他。

●『年報——昭和60年度版』大学セミナーハウス企画室編 1986年9月20日発行。  
 ◎希望の方は当企画室にお申し込み下さい。(無料)。

ダスキングYD研究会  
 ポーラ美容室  
 関東共立エコー  
 東芝\*  
 日本電気  
 日本電気フィールドサービス  
 ラッキアイ  
 花王化粧品東京  
 ホソカワミクロン  
 調布ハウジング

## 編集後記

金木犀の香りが本格的な秋の訪れを告げています。過ぎし夏に刻まれた出会いの数々。その中からハウスのモットーをデザインした表紙の絵は生まれました。「業務通信」にご紹介した国際集會の一つ、「社会開ロザリン・フラックス女史の手になる」です。  
 作品に添えて彼女は、Plain Living—Serenity, Peace, Harmony, Simplicity, High Thinking—Justice, Truth, Compassionのメモを残して、ハウスを後にされました。多分、この丘に住む精霊に促されてのことでしょう。(能)

セミナー等の問い合わせ先  
 企画室 〇三六六(六三三)(直通)

「セミナー・ハウス」一九八六年七月二十五日号 発行 財団法人大学セミナー・ハウス 東京都八王子市下柚木 〇四二六七六八五一 振替口座 東京五七四五九〇番/編集 〇三六六(六三三) 製作 〇三六六(六三三) 中央公論事業出版